



たんぽぽ通信

N0.2

今回は、風疹についてお話ししましょう！

妊娠初期の女性が風疹にかかると、流産したり、白内障または緑内障、先天性心疾患、難聴、脳炎、骨の病気、網膜症などの異常を持った赤ちゃんが生まれたりする可能性があります。

これを「**先天性風疹症候群**」と言います。妊娠初期にかかるほど流産や先天性風疹症候群が起こる可能性が高く、妊娠 20 週までに徐々に可能性は低くなり、妊娠 20 週以降の感染ではほとんど起こらないと言われています。

風疹に対する免疫力（抗体）を持っていれば妊娠時にかかることはありません。子どもの頃に風疹にかかっていたらよいのですが、かかったことのない人が問題になります。

感染症流行予測調査によると、風疹予防接種率は低くなっており、実際に 2003 年に 17 歳であった女性の風疹抗体陽性率は 54.2%、と非常に低くなっています。このままでは出産年齢にあたる女性が風疹抗体を獲得することなく妊娠した場合、「**先天風疹症候群**」が多発する可能性があります。

すでに妊娠されている女性は、

風疹流行時に感染者との接触を避けることが重要であり、

また、同居する家族からの感染を防ぐために、**家族の方の予防接種をお奨めいたします。**



また**妊娠を終えた女性**で、**風疹抗体のない、もしくは抗体価の低い方**は、お産後早期のうちに予防接種を受けられることをお奨めします。

予防接種は妊娠中にはうてませんが、授乳は問題ありませんし、接種後 2 ヶ月たてば妊娠してもかまいません（2 ヶ月間は避妊してください）。

当院でお産をされる方は、風疹の抗体価について調べさせていただきます。

ワクチンを受けた方がよいかどうかは、主治医にご確認ください。